

## がん看護専門看護師によるがん看護に携わる看護師への支援内容 看護師への面接調査から

著者	関谷 陽子, 大西 和子, 辻川 真弓
雑誌名	三重看護学誌
巻	14
号	1
ページ	41-53
発行年	2012-03-15
その他のタイトル	The support of oncology certified nursing specialist to general nurses related to oncology nursing through the interviews of general nurses
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/11826">http://hdl.handle.net/10076/11826</a>

# がん看護専門看護師による がん看護に携わる看護師への支援内容

— 看護師への面接調査から —

関谷 陽子<sup>1</sup>, 大西 和子<sup>2</sup>, 辻川 真弓<sup>2</sup>

## The support of oncology certified nursing specialist to general nurses related to oncology nursing — through the interviews of general nurses —

Yoko SEKIYA, Kazuko ONISHI and Mayumi TSUJIKAWA

### Abstract

The purpose of this study was to clarify about what kinds of support for general nurse to get from oncology certified special nurse (OCNS) were and the changes of their attitudes influenced by OCNS's support.

The subjects were 10 general nurses working for cancer patients. The data interviewed by the researcher was analyzed in using qualitative research method to be categorized.

As the results, there were 17 categories regarding OCNS' support and then induced into 4 aspects, such as the support of OCNS's offering the knowledge and skill to the nurses, the support of OCNS's making approaches to the nurses' awareness, the support of OCNS's positive feedback to the nurses, and the support of OCNS's working to multidisciplinary team. And there were 28 categories regarding the changes of the nurses' attitudes and then induced into 3 phrases such as the improvement of the nurses' knowledge and skill, the improvement of the nurses' mental states, and the improvement of positive relationship among medical professionals.

Finally in the discussion, the effective supports from OCNS showed 4 view points such as OCNS making the nurses' ability improve, OCNS making the nurses' mental states promote, OCNS watching the changes of the nurses' mental attitude, and OCNS developing the trusting relationship between the nurses and OCNS.

**Key Words:** oncology certified special nurse, general nurse, support, influence and change

### I. はじめに

がん患者は年々増加の一途をたどり、2008年現在、死亡数は33万人を超え全死亡数の30%を占めさらに今後、高齢者人口の増加により死亡数・罹患数ともに増加することが予測されており、国民にとって生命・健康の重大な問題となっている（厚生統計協議会、2009）。その一方で、がんの診断・医療は進歩し

まざまな効果をあげ生存期間は延長している。がん医療の進歩は、がん治療を高度化・複雑化し治療・療養の選択など医療に関する国民のニーズの多様化へとつながっている。また従来の「お任せ医療」から「自己決定の医療」へと変化（日野原、2003）しつつある現代において、医療の中心は延命治療第一から、患者の意向を尊重しQOLを重視する方向へ転換されてきている。その為、がん患者・家族への看護には、がんの

1 三重大学医学部附属病院

2 三重大学医学部看護学科

診断・治療から緩和的治療まですべての段階において、患者・家族の QOL 向上に視点をおいた全人的なアプローチが必要とされており（和田，2001），医療に携わる専門職種が一丸となり患者を支援していくことが求められる。

そのような背景から，昨今，患者を中心としたチーム医療の重要性が言われるようになり，それぞれの職種が専門性を発揮し役割を果たすことが必要となっている。看護もまた，看護職としての専門性を発揮しケア提供していくことが求められている。

看護の専門性として，日本には 2011 年 11 月現在，がん看護専門看護師（以下，OCNS）250 名が認定され（日本看護協会，2011），がん看護のスペシャリストとして活動している。OCNS の役割には，「実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究」の 6 つがあり，それぞれの役割をリンクさせながら，患者・家族への直接ケア，スタッフ支援，組織の改革など活動は多岐にわたる。また，専門看護師規則第 1 条にもあるように，OCNS は，看護のスペシャリストとして施設だけでなく看護学の向上を図ることや，社会に貢献することへの役割も担っている。

そのような背景の中，がん看護の現場において，がん患者の看護に携わる多くは，病棟・外来・在宅など第一線で働く現場の看護師であるジェネラリストたちである。患者・家族のニーズに応えるために高い看護を提供しようと日々，努力を重ねている。しかし，がん看護に携わる看護師は様々なストレスを抱えている（日野原，2003）。特に，治療技術の進歩により倫理的問題に直面することも多く非常に厳しい環境の中で看護を行っている。また，今後のがん医療においてチーム医療が必須とされる中，現場の看護師もチームの一員として専門性を発揮していく必要性があり看護職としての能力の向上が求められる。そのような状況において，現場の看護師への負担はさらに増えることが考えられ，看護師への支援の必要性が高まっていると言える。

がん看護への専門性が求められるなか，OCNS などのスペシャリストと現場の看護師であるジェネラリストが相互に高めあっていくことが，がん看護の質の向上において重要なことであり（山田，2008），OCNS の現場の看護師への支援は，がん看護の質を向上させるうえで大きな役割となる。

しかし，他領域も含めた専門看護師（以下，CNS）による看護師への支援に関する先行研究では，CNS の支援による現場の看護師への影響力について，CNS による活動報告（北村，2005）（小迫，2005）や，管理者による CNS 導入による現場の変化（市川他，

2003），CNS への期待（戎崎，2005）などに関する報告は多数あるが，それらは事例報告や活動報告であり，がん看護の領域における現場の看護師への支援内容を明らかにしたものは見当たらない。また，具体的な CNS からの支援内容について，現場の看護師の立場から明確にしたものは，小児看護領域（鈴木・林，2005）・精神看護領域（野末他，2004）（安田，2006）におけるものしか見当たらず，がん看護領域においても調査の必要があると考える。

以上より，今後ますますがん患者は増加し，より看護の専門性が求められるなか，看護の質の向上において OCNS が現場の看護師を支えていくことの必要性が高いことがわかり，OCNS から支援を受ける看護師たちは OCNS との関わりをどのように捉え，それによりどのような影響や変化をもたらしているのか明らかにすることにより，今後の OCNS の活動における示唆が得られると考え，OCNS から支援を受けている現場の看護師に焦点を当て検討していくことにした。

## II. 研究目的

本研究の目的は，OCNS のがん看護に携わる看護師への支援内容と支援による看護師自身の影響・変化を明らかにし，OCNS による病棟看護師への効果的な支援について示唆を得ることである。

### 〈用語の定義〉

支援（support）：がん看護に携わる看護師が捉えた，OCNS からの肯定的（ポジティブ）な関わりを支援とする。

影響（influence）：OCNS の支援を受けたことによる，看護師の気付き，認識，意識することを影響として捉える。

変化（change）：看護師の行動や気持ちの変化を変化として捉える。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象者

がん看護専門看護師がいる施設に所属する看護師で，以下の条件を満たし，研究参加への同意が得られた者とした。

①現在がん患者の看護に携わる看護師，②臨床経験 3 年目以上とし，プライマリーナースとしてがん患者の受け持ちの経験がある者，③OCNS に対して，公式的に相談を依頼し OCNS から何らかの支援を受けた経験がある者

なお、対象者の選定には、対象施設に所属する OCNS に口頭と書面にて同意を得、OCNS からコンサルテーションを受けた看護師を紹介してもらった。

## 2. 調査方法

- 1) 調査期間：2009年10月19日～2009年11月4日まで
- 2) データ収集方法：研究者が作成したインタビューガイドを使用して半構成的面接を行い、対象者の同意を得て面接内容をICレコーダーに録音した。面接時間は1回を30分から60分程度とし、面接回数は1人あたり1回とした。

## 3. 分析方法

質的・帰納的アプローチにより、録音した面接内容の逐語録を作成し、得られたデータを読み返し、対象者が OCNS との関わりとして語った内容から、「OCNS からの支援」と「支援による変化・影響」をその背景・状況も含めて抽出し分析単位とし、各分析単位を、「OCNS からの支援内容」と「支援による変化・影響」を別々に集めた。別々に集めたそれぞれの分析単位を最低限意味のわかる一文に変換しコード化した。

「OCNS からの支援内容」と「支援による変化・影響」それぞれの全対象のコードより類似性と関連性に基づきサブカテゴリー化しさらに同様の手順でカテゴリー化、コアカテゴリー化を行った。

分析の過程では、段階ごとに複数のがん看護分野の看護研究者にスーパーバイズを受け、妥当性を高めるように努めた。

## 4. 倫理的配慮

- 1) 研究対象者に対しては、本研究へ対象者の決定にあたり、施設の OCNS と病棟責任者に許可を得たうえで対象者の紹介を受け、対象者に、研究目的、方法、研究参加は自由意思によるもので、どの段階でも同意を撤回でき、拒否による不利益は生じないこと、語られる個人情報、OCNS に関すること、患者情報に関する氏名や個人を特定する記述はすべて匿名とし、プライバシーは守られること、面接は中断できること、知り得た情報は対象者を紹介した OCNS に漏洩することはなく不利益は生じないこと、その旨は OCNS からも承諾してもらっていることを口頭、書面で説明し同意を得た。
- 2) 各施設の OCNS に対しては、研究目的、方法、研究参加は自由意思によるもので、どの段階でも同意を撤回でき、拒否による不利益は生じないこと、協力者から語られた内容は個人が特定できないよう

にすること、面接内容が OCNS の活動の内容に触れ、部分的に評価につながる可能性があり不利益な情報となり得る内容が含まれる可能性があるが、それらの情報は、研究目的に合致しないため研究者の権限において除外すること、対象者から得られたすべての情報は、第三者や協力者である OCNS に漏洩することは決してしないこと、OCNS のプライバシーの保護と名誉を傷つけることのないように努めることを口頭、書面で説明し同意を得た。

なお、本研究の実施にあたっては、三重大学医学部倫理審査委員会の審査を受け承認を得た。

## IV. 結果

### 1. 対象者の概要と面接時間 (表1)

対象者は10名で、臨床経験年数は3年目～14年目であった。面接は1人につき1回行い、面接時間は対象者1人当たり平均31分であった。

表1 対象者の概要と面接時間

臨床経験年数	がん患者の看護に携わっている期間 (現在の部署)	面接時間
3年目	3年 (内科系病棟)	34分
3年目	3年 (外科系病棟)	23分
4年目	4年 (内科系病棟)	25分
6年目	1年 (化学療法部)	41分
6年目	2年 (内科系病棟)	31分
7年目	6年 (外科系病棟)	33分
9年目	6年 (外科系病棟)	33分
11年目	3年 (外科系病棟)	33分
12年目	12年 (内科系病棟)	34分
14年目	14年 (外科系病棟)	60分

### 2. がん看護専門看護師による看護師への支援内容 (表2)

全データから、看護師への支援内容に関する65のサブカテゴリーが抽出され、それらの関係性から17のカテゴリーが導きだされた。カテゴリー間の関係性によってそれらは、4つのコアカテゴリーに分類された (表2)。以下に、コアカテゴリーごとに内容を説明する。なお、以下の説明では OCNS の表記を CNS として記す。

#### 1) 【CNS の知識・技術による支援】

〔患者・家族への CNS の知識・技術の提供〕は、看護師が対応に困惑する患者・家族に対し CNS が直接介入し、また、看護師の状況を見極めたうえで CNS

表2 OCNS による看護師への支援内容

【コアカテゴリー】	【カテゴリー】	“サブカテゴリー”
CNSの知識・技術による支援	患者・家族へのCNSの知識・技術の提供	自分たちでは困難な患者への直接的ケアの提供
		CNSとして介入できる部分を見極めたうえでのケア提供
		対応困難な患者に率先した関わり
		患者の訴えの長時間の傾聴
		対応困難な家族への直接介入
	看護師への知識の提供	最新の知識の提供を受ける
		薬剤について具体的な知識の提供を受ける
		看護について知識の提供を受ける
		学習の機会の提供
看護師の気付きへの働きかけ支援	患者・家族情報に関するアドバイス	患者から得た情報の提供を受ける
		自分たちでは気付いていない患者の精神面の情報の提供を受ける
		外来での患者情報の提供を受ける
		家族から得た情報の提供を受ける
	症状緩和に関するアドバイス	対応処置に苦慮する患者について関わり方のアドバイスを受ける
		疼痛緩和の方法のアドバイスを受ける
	家族ケアに関するアドバイス	患者・家族への関わり方への具体的なアドバイスを受ける
		対応に困惑する患者の家族に対する関わり方のアドバイスを受ける
	患者理解を促進するアドバイス	患者の捉え方の視点を変えるアドバイスを受ける
		患者の理解を促進するためのアドバイスを受ける
		効果的な情報収集の方法のアドバイスを受ける
		患者理解を促進するための気付きを促すような問いかけを受ける
	問題状況理解への働きかけ	アセスメントの不足部分のアドバイスを受ける
		問題状況について考える機会をつくる
	適切なケア提供の誘導	問題状況を一緒に考える
		客観的な立場から捉えた問題状況を伝える
		患者のタイミングをはかった適切なケアのアドバイスを受ける
		大切なケアのポイントを考えさせるようなアドバイスを受ける
		適切なケア提供に向けて病棟看護師に働きかけをする
		病棟看護師の立場にたったケア方法のアドバイスを受ける
患者ケアの在り方について自然に教えてくれる		
看護の方向性を乱さずサポートしてくれる		
患者ケアにおいて後方支援にまわってくれる		
事前に理解度を確認したうえで次行うことを勧める		
ケアの方向性を絞ってもらう		
看護師への肯定的フィードバック	ケアへの肯定的な評価	頑張っていることに対して、肯定的なフィードバックを受けた
		患者への関わりに対して肯定的な評価を受けた
		行っているケアに対して肯定的な評価を受けた
	看護師の悩みの傾聴	肯定的なケアの評価をもとに励ましてくれる
		看護師の辛い思いを傾聴し感情の整理を手伝う
	看護師の考えの尊重	看護師の患者に対する思いを傾聴する
		看護師の意向を確認する
	常時相談に応じる姿勢	看護師の考えを支持する
		看護観を大事にする
		常時相談に応じるという姿勢でいてくれる
	看護師への気配り	必要度に応じて病棟に頻回にきてくれる
		時間を問わず病棟にきてくれる
		辛い状況にある看護師にタイムリーなサポートをする
		辛い状況にある看護師を気にかける
		看護師の置かれている状況を配慮したうえでサポートする
気にかけている姿勢を自然に見せる		
患者との関わりを気にかけてくれている		
患者との対応における疑問点を確認してくれる		
アドバイスを基に実践したケアを確認してくれる		
患者の良い変化や状況を察知し伝えてくれる		
率直な思いの表出	困難な問題に対してCNSとしての率直な思いを伝える	
ケアの意味づけ	客観的な立場から看護師の行っているケアの意味付けをしてもらう	
円滑なチーム医療への支援	リーダーシップの遂行	職場での問題に対して迅速に解決策を導いてくれる
		先頭にたって行動をする
	医療チームの調整	業務改善を進める
		医師と病棟スタッフとの調整を行う
		医師と患者のケア方法を相談する
		医師に対して患者理解を促進する関わりを行う
看護師の代弁者として医師に関わる		
他職種間との調整をし問題解決を行う		

が率先して患者や家族にケアを提供するものであった。[看護師への知識の提供]は、疼痛緩和に関する薬剤や副作用について直接 CNS から説明を受け、さらにそれらに関する研修や学習会に参加することを CNS から提案されるなど、CNS は看護師へ知識を提供していた。

2) 【看護師の気付きへの働きかけ支援】

このコアカテゴリーは、[患者・家族情報に関するアドバイス]、[症状緩和に関するアドバイス]、[家族ケアに関するアドバイス]、[患者理解を促進するアドバイス]といった、CNS から、患者・家族情報や情報収集の具体的な方法、症状緩和の方法、家族ケア、不足しているアセスメント、患者の理解を促進するようなアドバイスや問いかけを受けていた。また、[問題状況理解への働きかけ]は、CNS と共に生じている問題について考え、その状況の整理を行い、時には客観的に捉えた問題状況を CNS から伝えられていた。[適切なケア提供の誘導]では、提供可能なケアを考えさせるようなアドバイスを CNS から受け、また、CNS が患者に率先して関わるのではなく、看護師にケアさせるといった後方支援を受け、さらにケア前後のフォローを受けていた。

3) 【看護師への肯定的フィードバック】

このコアカテゴリーは、看護師が行っているケアや困難な問題を抱える患者との関わりについて、CNS から[ケアへの肯定的な評価]を受け、また、CNS は、どのような状況でも[常時相談に応じる姿勢]をみせ、[看護師の悩みの傾聴]では、看護師自身の辛い思いや、患者への複雑な思いを傾聴し、看護師の意向や意見、看護師が大事に思う部分を支持し、[看護師の考えの尊重]をするという CNS の対応であった。[看護師への気配り]は、CNS から、困難な状況を配慮した声かけ、廊下や病棟でのさり気ない声かけ、

患者の変化を察知しその変化を伝えてくれる、患者との関わりを気にかけてくれる、ケアを確認してくれる、といった CNS の看護師を気遣う関わりであった。

[率直な思いの表出]は、解決策を見いだせない問題の困難さについて、CNS から素直な言葉をもらうという関わりであった。[ケアの意味づけ]は、患者へのケアに疑問が生じ自信をなくしていた時に、そのケアにどのような意味があるのかを伝えてもらうという関わりであった。これらの関わりは、看護師が CNS から肯定的なフィードバックを受けるといった支援であった。

4) 【円滑なチーム医療への支援】

[リーダーシップの遂行]は、職場の問題に対して、緊急度に応じて CNS 自身が率先して行動し、安全で効率よく業務が行えるように業務改善を先頭に立って行うという CNS の活動であった。[医療チームの調整]は、CNS が医師と直接関わり、患者理解の促進、ケア方法の相談、看護チームの意向の伝達、という医師との関わりであった。

3. がん看護専門看護師の支援を受けたことによる看護師自身の影響・変化

全データから、CNS の支援による看護師自身の影響・変化に関する 66 のサブカテゴリーとそれらの関係性から 28 のカテゴリーが抽出され、カテゴリー間の関係性によってそれらは、8つのコアカテゴリーに分けることができた。さらに、コアカテゴリーの関係性を分析した結果、《看護師の知識・技術の向上》《看護師の精神面の向上》《医療チームの関係向上》の3つの局面に分類することができた。3つの局面とそれを構成するコアカテゴリーを表3に示し、また、以下に3つの局面ごとに構成するコアカテゴリーを説明する。

表3 OCNS の支援を受けたことによる看護師自身の影響・変化の局面

《局面》	【コアカテゴリー】
1. 《看護師の知識・技術の向上》	がん看護に関する知識・技術の向上
	全人的な患者理解とそのケアへの気付き
	適切なケアの提供
2. 《看護師の精神面の向上》	看護師自身の精神面の成長
	肯定的な自尊感情の高まり
	がん看護に対するモチベーションの向上
	看護師の自律と自覚の芽生え
3. 《医療チームの関係向上》	医療チームの関係向上

表4 局面1：看護師の知識・技術の向上

【コアカテゴリー】	【カテゴリー】	“サブカテゴリー”
がん看護に関する知識・技術の向上	がん看護に関する知識の向上	がん看護に関する知識の向上
		疼痛緩和に関する知識の向上
アセスメント能力の向上		
	病棟看護師の看護レベルの向上	病棟看護師の看護レベルの向上
全人的な患者理解とそのケアへの気付き	患者の置かれた状況を踏まえた関わりに気付く	患者の置かれた状況を踏まえた関わり方に気付く
		患者の発言の意図をくみ取る重要性に気付く
		症状マネジメントの重要性に気付く
		見落としがちな観察点に気付く
		家族ケアの大切さに気付く
	問題解決への糸口に気付く	問題の中心に気付く
		ケアの糸口の発見
	患者理解の深まり	患者理解の深まり
		患者の問題への捉え方の深まり
		患者理解を促進する内容の情報提供
		患者の見方の変化
	適切なケアの提供	CNSの介入により円滑な患者ケアの提供
適切な看護の提供		
困難な状況にある患者への積極的な関わりが可能となる		適切な看護の提供
	困難な状況にある患者への積極的な関わりが可能となる	患者の問題点を意識した関わりができるようになった
		苦手意識の状況にある患者への対応が可能となった

1) 局面1《看護師の知識・技術の向上》(表4)

(1) 【がん看護に関する知識・技術の向上】

このコアカテゴリーは、がん看護全般や疼痛緩和に関する知識・技術が構築されたこと、患者のアセスメント能力が向上し、がん看護に関する知識が向上したという変化であった。また、看護師が他のスタッフの姿や記録内容、CNSと関わる姿を見て、病棟看護師の看護レベルの向上を感じとっているという内容であった。

(2) 【全人的な患者理解とそのケアへの気付き】

このコアカテゴリーは、患者の些細な発言の重要性を認識することや、患者の家族や背景にあるものを含めて、患者の置かれた状況に気付くという変化や、患者を違った側面から視点を変えみることができるようになり、患者理解が促進されたという変化であった。また、複雑な問題に遭遇し行き詰まっている時に、問題の核に気付き、問題解決への糸口を見つけることができるようになったこと、さらには患者理解が深まり、そのケアに気付くことができるようになったという変化であった。

(3) 【適切なケアの提供】

このコアカテゴリーは、CNSの患者への直接介入により、患者へのケアが行いやすくなったという変化

や、CNSの技術的・精神的な支援により、患者の潜在的な問題点を意識した関わりが可能となり、適切なケアが提供できるようになったこと、さらには苦手意識の状況にある患者に積極的に関わりができるようになったという影響・変化であった。

2) 局面2《看護師の精神面の向上》(表5)

(1) 【看護師自身の精神面の成長】

このコアカテゴリーは、CNSの支援を受けることにより安心感が得られることや、精神的な混乱から解放され、困難な状況から逃避することなく問題に向き合えたという変化であった。また、CNSの存在に気持ちが落ち着き、緊張感の緩和や後悔の念にかられずに済み、やり場のない思いを自己で受容できた等の、感情のコントロールが図れることが可能となったこと、CNSとの関わりや、CNSが近くにいることで、精神的な苦痛が軽減され、安心して患者にケアが提供できるという変化であった。さらには、様々な場面でのCNSとの関わりにより、CNSの存在の必要性を認識したという内容であり、看護師の精神面が成長したという影響・変化であった。

表5 局面2：看護師の精神面の向上

【コアカテゴリー】	【カテゴリー】	“サブカテゴリー”
看護師自身の精神面の成長	CNSの支援を受けることによる安心感	CNSの患者への継続ケアによる安心感
		CNSに頼れることへの安心感
	逃避することなく困難な問題への直視	困難な状況に向き合うことができた
		精神的な混乱からの解放
	CNSの存在によって自己の感情コントロールができる	CNSの存在により気持ちの安定がはかれる
		CNSの声かけで自分の感情のコントロールができた
		患者ケアにおいて後悔を抱かずにすんでいる
		CNSの声かけにより緊張感の緩和になった
精神的負担の軽減	CNSの共感的態度に救われる	
	抱えている問題に対する精神的苦痛からの解放 職場環境における精神的負担の軽減	
安心してケアに取り組むことができる	CNSの支援により安心してケアに取り組める	
精神的サポートとしてCNSの存在の必要性を認識	精神的サポートとしてCNSの存在が必要だと認識する	
肯定的な自尊感情の高まり	患者ケアへの自信	患者ケアへの自信
	自己の潜在的能力に気付く	潜在的な自分の能力を引き出してもらえた
	ジェネラリストとしての自分の能力を容認	ジェネラリストとしての自分の能力を容認
		自分の行っているケアを承認してもらうことで不安の解消になる 自分の行っているケアの意味を再認識する
モチベーションの向上	看護へのやりがい感を抱く	看護へのやりがいを感じる
	より良い看護の提供に向けての意欲の向上	仕事への意欲が向上
		より良いケアを提供していくことへの意欲の向上
		問題を抱えている患者と関わることへの意欲の向上
		CNSの活動が自分の励みになる 学習することへの意欲の向上
がん看護への関心の高まり	がん看護への関心が高まる	
看護師の自律と自覚の芽生え	看護師の自律性の促進	自分たちのできる看護を考える
		看護の力を再認識する
	看護観を持つことの必要性を認識する	看護観を持つことの必要性を認識する
		看護観の見直すことができる
	CNSとの協働の重要性を認識する	患者ケアにおいて、CNSとの協働の必要性を認識する
		CNSと病棟スタッフのそれぞれの役割を發揮することの重要性を認識した
	患者ケアの在り方を認識し実践する	CNSの活用による患者ケアの向上の在り方を認識する
		CNSとの信頼関係が患者ケアの向上になる
		CNSの活用による患者と病棟スタッフとの関係構築の在り方に気付く
		病棟のがん看護の質の向上に向けて先導していく必要性を認識する
スタッフへのがん看護の知識を浸透させていく必要性を認識		
患者ケアにおける病棟スタッフの在り方を認識する	病棟におけるがん看護の質の向上に向けて活動する	
	CNSのスタッフへの関わりから、病棟スタッフへの支援の在り方に気付く	
	CNSから受けたケアから病棟スタッフへの支援の在り方を認識する CNSとの関わりを通して、若手スタッフの育成の在り方を考える	



(2) 【肯定的な自尊感情の高まり】

このコアカテゴリーは、CNSの支援により、患者ケアへの自信がついたこと、また、自分では気付いていなかった自己の潜在能力に気付けたこと、さらには、病棟看護師としての自己の能力に不安があったが、自己の能力を容認できるようになったという自尊感情が高まったという影響・変化であった。

(3) 【がん看護に対するモチベーションの向上】

このコアカテゴリーは、CNSの支援やCNSとの関わりを通して、自分の成長を感じ、看護へのやりがい感、仕事への意欲の向上、がん看護への関心の高まり、自己の能力をさらに向上させようとする思い、患者との関わりに意欲的になるといった、より良いケアの提供に向けてモチベーションが向上したという影響・変化であった。

(4) 【看護師の自律と自覚の芽生え】

このコアカテゴリーは、問題に対してCNSにすぐに頼らずに自分たちでできる看護はないかと模索し、苦しむ患者に看護として提供できる術を考えるようになり看護師の自律性が促進されたこと、また、自分の看護観を持つことの必要性や、ケアの向上には、CNSとそれぞれの役割を發揮し協働していくことが重要だと認識したこと、また、病棟全体のがん看護の向上、スタッフの精神的ケア、若い看護師の育成の必要性を認識したこと、さらには自ら病棟スタッフの育成、支援をする役割を担って活動していくようになったという影響・変化であった。

3) 局面3《医療チームの関係向上》(表6)

(1) 【医療チームの関係向上】

このコアカテゴリーは、CNSから習得したコミュニケーションを実践したことや、患者にCNSを紹介したことで結果的に患者と病棟スタッフとの関係が良くなったという患者との関係の向上や、医師との連携が円滑になったこと、CNSのサポート的な姿勢により職場の人間関係や環境が良好になったという内容

であり、患者、医師、スタッフ間の関係が向上したという変化であった。

V. 考 察

結果に基づいて、OCNSによる看護師への支援内容、OCNSの支援により看護師自身の影響・変化、支援内容と影響・変化との関連について3点を考察し、OCNSによる看護師への効果的な支援の方向性について検討を行った。なお、以下の説明ではOCNSの表記をCNSとして記す。

1. がん看護専門看護師による看護師への支援内容について

1) 【CNSの知識・技術による支援】では、CNSが現状を見極めたうえで、専門的な知識・技術を活かし、患者・家族に率先して関わることで看護師を間接的に支援し、また、そのCNSの後ろ姿を見ることで看護師は学びを得ており、CNSが役割モデルとなっていると考える。【CNSの知識・技術による支援】は、看護師へ直接的、間接的に支援を提供するものであった。

2) 【看護師の気付きへの働きかけ支援】では、看護師の適切なケアの提供を可能にするための支援である。CNSが看護師にアドバイス・働きかけ・誘導することで、看護師が患者にとって有効なケアに気付き、よいケアを提供できるといった、患者への看護に繋がる看護師への直接的な支援であった。

3) 【看護師への肯定的フィードバック】では、[看護師の悩みの傾聴]、[常時相談に応じる姿勢]、[看護師への気配り]のCNSの姿勢や対応が肯定的なフィードバックへとつながっていた。特徴的であったのが、[看護師への気配り]である。この構成要素には“看護師を気にかける”という具体的支援が含まれていた。「自分は一人じゃないって思えた」「自分のために時間を割いてもらって、気にしてくれる人が

表6 局面3：医療チームの関係向上

【コアカテゴリー】	【カテゴリー】	“サブカテゴリー”
医療チームの関係向上	患者との関係の向上	CNSの介入による患者と病棟スタッフとの関係向上
		CNSから習得した関わりにより患者との関係の向上
	医師との関係の向上	CNSの介入により医師の指示に納得できた
		医師との連携がスムーズになる
		CNSの病棟スタッフの育成による医師-看護師の連携の促進
	スタッフ間関係の向上	良好な職場環境の保持
		相談しやすい人間関係となっている

いる（ことが嬉しかった）」「（CNSは）自分にとって味方である」との対象者の言葉にもあるように、CNSの自然な振る舞いや何気ない声かけが、受け手となる看護師を勇気づけ、それが支援に繋がっていた。

4)【円滑なチーム医療への支援】では、CNSは、コーディネーターの役割としてチーム医療において不可欠な他職種との連携促進を図るなかで、看護師が看護の立場でチームの一員として役割を果たすことができるように、看護師を間接的に支援していたと考える。

以上、CNSによる看護師への支援内容を図1のように示した。CNSは、看護師と関わりをもつ中で、看護師が相談する或いは相談しないに関わらず、看護師の状況を察知しながら、潜在的な問題を意識して関わっていることが明らかとなった。そして、看護師へ支援を行う際には、コンサルテーションの機能を中心にCNSの役割である実践、教育、調整、の機能を使いわけながら支援していたと考える。

これらのことから、CNSの支援内容の全体像は、看護師を取り巻く環境（病棟全体、医師など）や看護チームの状況を見極めたうえで、情報を提供する情報の「スペシャリスト」として、患者への直接ケアを通しての役割モデルとして、また、看護師への知識・情報の提供者として【CNSの知識・技術による支援】を行っていた。そして調整者として【円滑なチーム医療への支援】を行いながら、相談者である看護師には「擁護者」「事実の調査者」「協働する問題解決者」「客観的な観察者」として【看護師の気付きへの働きかけ支援】、【看護師への肯定的フィードバック】を行うことで、看護師の問題解決能力を高め、前向きにケアしていけるように支援を提供していたと考える。

また、4つの支援においても、一つ一つの支援の機能を使いわけ、またリンクさせながら看護師に提供し

ていた。その中で中心となるのが、看護師のケア提供に直接関連する2つの支援である。それは、看護師が主体となってケアに取り組めるように誘導する【看護師の気付きへの働きかけ支援】や、看護師のケアの継続を可能にするための【看護師への肯定的フィードバック】の直接的支援である。そして、患者・家族の対応に苦慮している時や、知識や情報を必要としている時に、【CNSの知識・技術による支援】を行い、医師をはじめとする他職種と連携が必要な時には、【円滑なチーム医療への支援】を行うことで、看護師を支援していた。

## 2. がん看護専門看護師の支援を受けたことによる看護師自身の影響・変化について

### 1) 局面1《看護師の知識・技術の向上》

【がん看護に関する知識・技術の向上】は、がん看護全般にわたる知識や疼痛緩和に関する知識、そして、それらを統合し、全人的ケアの必要性に気づいたことで、看護師の知識・技術の向上に繋がった。【全人的な患者理解とそのケアへの気付き】は、患者の複雑な問題に困惑している状況において、患者理解が深まることで、患者の置かれた状況を踏まえた関わりに気付き、問題解決への糸口が見つかるという影響・変化であった。そしてその変化は、【適切なケアの提供】に向けて、看護師に大きな影響を与えた。

【適切なケアの提供】は、「対応に困惑する患者に対する抵抗感が軽減した」、「苦手意識の状況にある患者に積極的な関わりができるようになった」といった看護師の患者対応への変化を示していた。また「看護師間で統一されたケア提供ができるようになった」、「患者の背景にあるものを踏まえて関わるができるようになった」というように、円滑に適切なケア提供が可能になった影響・変化であった。これは、患者理解が促進され、ケアの幅が広がったことを示しており、そしてそのケアが実際、提供されることで、ケアの向上になっていると推測できる。

以上のことから、《看護師の知識・技術の向上》は、看護師のケア提供における実践部分の影響・変化である。そして、それぞれの影響・変化が関連し合いながら、看護の実践能力を向上させていると考える。

### 2) 局面2《看護師の精神面の向上》

【看護師自身の精神面の成長】は、困難な問題に遭遇しながらも、CNSの存在によって得られる安心感や精神的負担の軽減、そして自己の感情や思いを受容することで問題から逃避することなく、困難な状況に持ちこたえ、ケアに取り組むことができるという影響・

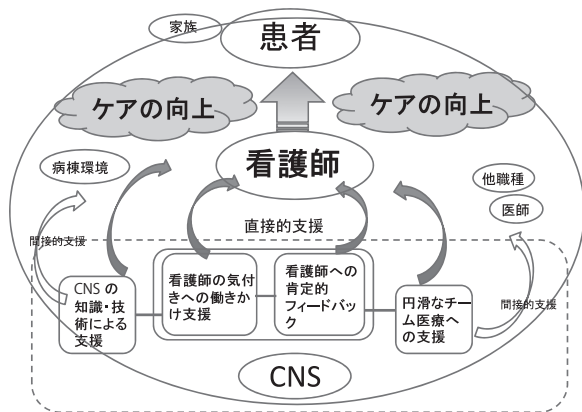


図1 OCNSによる看護師への支援内容

変化であった。これは、看護師の精神面の成長を意味するものであり、ケアへの意欲の維持や回復へとつながっていくと考えられ、その根底には、CNSの存在自体が後ろ盾となっていることで安心感につながっていた。【肯定的な自尊感情の高まり】は、対応に困惑している患者へのケアや看護師としての能力に自信を失いかけている看護師が、自分の潜在能力に気付くことができ、自分の能力を容認することで自信を取り戻し、ケアへの意欲がもてるといふ、看護師の自尊感情に影響し変化していることを示すものである。【がん看護に対するモチベーションの向上】は、看護に楽しみを感じ、がん看護への関心が高まり、さらに自分の能力を向上しようとする意欲を表している。【看護師の自律と自覚の芽生え】は、看護師が、自分たちの置かれている現場において、ケア向上に向けて、自分たちでできることは何かを考え、そして何が必要となるのかを認識し、実践にうつしていくという影響・変化であり、看護師が専門職としての自覚を持ち、自律が芽生えてきたという表れである。

以上のことから、《看護師の精神面の向上》は、患者へのケア提供の継続とケア向上への意欲となる精神面への影響・変化であったと言える。この局面では、【看護師自身の精神面の成長】により、【肯定的な自尊感情の高まり】、【がん看護に対するモチベーションの向上】へと繋がり、さらには【看護師の自律と自覚の芽生え】に繋がっていくと考えられる。

### 3) 局面3《医療チームの関係向上》

【医療チームの関係向上】のポイントとなるのが、チーム医療の中心である「患者との関係の向上」であると考えられる。患者との関係が構築されてこそ適切なチーム医療の提供が可能となるため、患者との関係性を向上させることが必須である。以上から、《医療チームの関係向上》は、チーム医療の提供を促進する影響・変化であると考えられる。

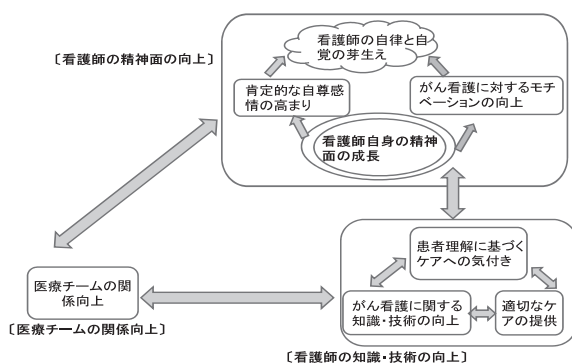


図2 OCNSの支援を受けたことによる看護師自身の影響・変化

以上、CNSの支援を受けたことによる看護師自身への影響・変化を図2のように示した。CNSの支援による看護師自身の影響・変化は、3つの局面が導きだされた。それらは、ケア提供における実践能力の向上、ケア提供の維持と向上への意欲となる看護師の精神面の変化、また、円滑なチーム医療を遂行するための他職種との関係の促進という特徴を示した。

また、3つの局面は、《看護師の知識・技術の向上》により患者理解が深まり、適切なケアへとつながり、さらに患者との関係の向上にもなり得る。また、そのように主体的にケアに取り組む姿勢は、医師との関係性にも影響しうることになる。その結果、《医療チームの関係向上》となり、他職種間の連携が促進されることで適切なケア提供ができる。また、《看護師の精神面の向上》により、ケア意欲が回復することで適切なケアが提供できる、といったように影響・変化の局面間で連動しながら看護師の成長を促進させ、ケアの向上へとつながっていくのではないかと考える。

3つの局面において、特に重要となるのが、看護師自身が直接影響を受け変化をしている《看護師の精神面の向上》であると考えられる。先にも述べたように、がん看護に携わる看護師の現状は厳しいものである。その状況の中、看護師が専門職としての能力を向上させ、ケアが継続でき、看護にやりがい感や満足感を感じながら看護を継続していくうえでは、精神面への支援が不可欠であり、看護師を支援していくうえのポイントになると考える。

### 3. 支援内容と看護師の影響・変化との関連と今後の方向性について (図3)

1) 看護師の潜在的な能力を引き出し、その力を延ばしていく

看護師は、困難な状況に遭遇し、時には自分の提供しているケアへの自信を失い、行っているケアが適切

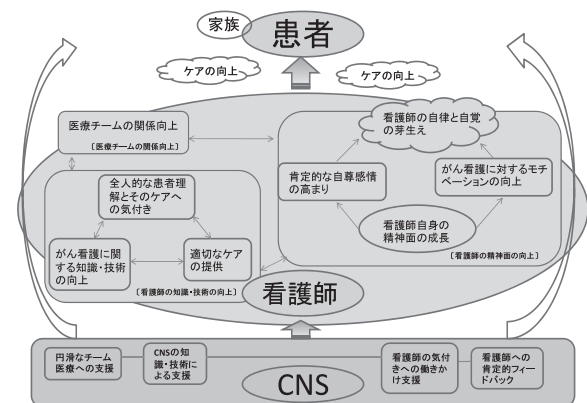


図3 OCNSの支援内容と看護師の影響・変化との関連

なのかと苦悩することがある。そのような中、CNSは、【CNSの知識・技術による支援】、【看護師の気付きへの働きかけ支援】を中心に、看護師のどこを補い、強めれば、患者にとって有効なケアの実践につながるかを考慮し、看護師に働きかけ、主体的にケアに取り組めるような支援を行っていた。また【看護師への肯定的フィードバック】により、精神面を支援し、困難な状況にもちこたえ、ケア意欲を回復できるように関わっていた。安田（2006）が、CNSによる看護師への支援には、コンサルテーションを通し、看護師の潜在能力を引き出し、看護師が自信をもってケア提供ができるように支援すること、つまり看護師をエンパワーメントするような働きかけをすることが重要であると述べているように、看護師の潜在能力を引き出し、その力を延ばしていく支援が必要である。

## 2) 《看護師の精神面の向上》を促進させる

先述したように、看護師が受けた影響・変化の中で《看護師の精神面の向上》がケアの継続・向上において、重要なものである。小谷野（2001）は、自己効力は、看護師が自律的な行動を示すうえで不可欠であると述べている。自己効力を育成するには遂行体験の達成（成功体験）が最も効果があり（佐藤，2007）、適切なフィードバックは成功体験になり、この積み重ねが自己効力を高めることになる（小野谷，2001）と述べている。本研究においても、看護師は、CNSからの【看護師への肯定的フィードバック】を受けることにより、それが成功体験となって自己の能力を容認し、ケアへの自信となり【肯定的な自尊感情の高まり】、【がん看護に対するモチベーションの向上】へとつながり、さらには【看護師の自覚と自律の芽生え】へとつながっていたと考えられ、《看護師の精神面の向上》は重要なものである。このように、《看護師の精神面の向上》に向けて、適切なフィードバックを効果的に使用し、看護師の精神面への支援として、成功体験を積み重ねられるように関わっていくことが必要である。

## 3) 看護師の変化を見守りその過程を支える

看護師はCNSの支援により様々な影響・変化を受け成長し、ケアを実践していることが明らかとなった。そして、その影響を受け変化したことは、3つの局面間で関連しあいながら看護師としての自覚と自律を芽生えさせていくことが示された。しかし、看護師は、日々、様々な問題に直面する中で気持ちや感情の変動もあり、ケアへの意欲や自信が再び消失するような出来事にも遭遇すると考えられる。そのような看護師の

背景を踏まえて、《看護師の精神面の向上》の促進を図る必要がある。そのためには、看護師や看護を取り巻く周囲を含めてアセスメントし、その結果に基づいて、心理的に支援し、役割モデルを示すことなどを通して、CNSと看護師が影響しあいながら看護師の変化の過程を支援し（宇佐美，2005）、見守っていく必要があると考える。

## 4) 看護師との信頼関係の構築につとめる

CNSの支援による看護師の影響・変化の根底にはCNSと看護師との信頼関係が大きく影響していると考えられる。今回、対象者の発言の随所にCNSへの信頼度の高さを感じ、看護師の心の拠り所になっていることが伺えた。片平ら（2004）は、精神看護CNSが可視的に実践することは、精神看護CNSへの信頼度を高め、その活用を促進することにつながると同時に、ナースの全体の実践力を高めることにつながると述べている。このように、本研究においても根底には、CNSの日々の実践活動が信頼を培い、看護師とCNSとの良好な関係が築きあげられていたと考える。

## VI. おわりに

本研究は、がん看護専門看護師（OCNS）のがん看護に携わる看護師への支援内容と支援による看護師自身の影響・変化を明らかにすることを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。

1. 全データから、OCNSによる看護師への支援内容に関する17のカテゴリーが抽出され、それらの関係性から、【CNSの知識・技術による支援】【看護師の気付きへの働きかけ支援】【看護師への肯定的フィードバック】【円滑なチーム医療への支援】の4つが導きだされた。その中で中心となるのが、【看護師の気付きへの働きかけ支援】と【看護師への肯定的フィードバック】の看護師に対する直接的な支援であった。
2. 全データから、OCNSの支援を受けたことによる看護師自身の影響・変化に関する28のカテゴリーが抽出され、それらの関係性から、【がん看護に関する知識・技術の向上】【全人的な患者理解とそのケアへの気付き】【適切なケアの提供】【看護師自身の精神面の成長】【肯定的な自尊感情の高まり】【がん看護に対するモチベーションの向上】【看護師の自律と自覚の芽生え】【医療チームの関係向上】の8のコアカテゴリーに分けることができた。さらに、それらの関連性から、《看護師の知識・技術の向上》《看護師の精神面の向上》《医療チーム

の関係向上》の3つの局面が導き出された。この局面の中心となるのが、ケアの質を向上させていくうえで不可欠な《看護師の精神面の向上》であった。また、3つの局面は連動しながら看護師の成長を促進させていた。

3. OCNSの看護師への支援内容と看護師自身の影響・変化との関連から看護師への効果的な支援として、①看護師の潜在的な能力を引き出し、その力を延ばしていく、②《看護師の精神面の向上》を促進させる、③看護師の変化を見守りその過程を支える、④看護師との信頼関係の構築につとめる、の4点が示唆された。

今後、ますますがん患者が増加する中で、がん患者と家族のケアに責任をもつ看護師を多方面から支援し、看護師が主体的に患者ケアを実践して、やりがい感、満足感を高めていくことが必要である。そのためには、OCNSの支援により看護師自身が受けた影響・変化を明示し、現場の看護師側からOCNSを有効かつ積極的に活用することを推進していくことも必要である。OCNSと積極的に関わっていくことで看護師の成長が促進され、患者ケアへと活かせるのではないかと考える。

## 謝 辞

本研究への参加を快く承諾してくださり、お忙しい中、とても貴重な情報を提供してくださいました対象者の皆さま、また本研究を実施するにあたり、研究を快く受け入れて下さいました諸施設長をはじめ関係諸局の皆さま、OCNSの皆さまに深くお礼を申し上げます。

## 文 献

市川幾恵・梅田恵・石橋悦子(2003): CNSの十分な活用でスタッフの看護が向上, 看護, 55(7), 020-026.  
宇佐美しおり・野末聖香・片平好重他(2005): 精神看護専門看護師活動成果に関する研究—直接ケア技術とコンサルテーションの機能に焦点をあてて, 臨床看護, 3(11), 1622-1631.

小谷野康子(2001): 看護専門職の自律性に影響を及ぼす要因の分析—急性期病院の看護婦を対象にして—, 聖路加看護大学紀要, 27, 1-9.

片平好重・宇佐美しおり・福田のりこ他(2004): 精神看護専門看護師の直接ケア技術の開発および評価に関する研究—最終回, 看護, 56(2), 84-87.

戎崎 恵(2005): CNSへの相談を活用した病棟ナースの実践報告—モルヒネの副作用症状が強かったがん患者の疼痛マネジメント—, がん看護, 10(2), 163-165.

北村愛子(2005): 急性看護領域; クリティカルケア看護専門看護師としての活動と評価, 臨床看護, 31(11), 1650-1655.

厚生統計協議会(2009): 国民衛生の動向・厚生指標 増刊, 56(9), 49-51, 151-154.

小迫富美恵(2005): がん看護; がん看護専門看護師の疼痛マネジメント, 臨床看護, 31(11), 1617-1621.

佐藤栄子編者(2007): 中範囲理論入門, 第2版, 日総研, 285-292.

鈴木君江・林 圭子(2005): 小児専門看護師導入1年後の活用実態—看護者への質問紙調査から(第一報), 日本看護学会論文集 看護管理, 36, 374-376.

鈴木君江・林 圭子(2005): 小児専門看護師導入1年後の活用実態—看護者への質問紙調査から(第二報), 日本看護学会論文集 看護管理, 36, 377-379.

日本看護協会ホームページ: <http://www.nurse.or.jp/nursing/qualification/senmon/touroku.html> (2011-11-15)

野末聖香・宇佐美しおり・福田紀子他(2004): 精神看護専門看護師によるコンサルテーションの効果, 看護, 56(3), 70-75.

日野原重明監修(2003): 改訂版がん看護マニュアル, ナーシングマニュアル第1巻, 学研, 419-426, 428-431.

安田妙子(2006): 精神専門看護師のコンサルテーションにおける援助内容—ナースへのインタビュー調査から—, 精神看護学, 33(1), 49-56.

山田佐登美(2008): がん看護実践能力を高めるスペシャリストと看護管理者の立場の役割, 看護, 60(13), 40-43.

和田栄子(2001): がん看護専門看護師の活動と効果, 日本がん看護学会誌, 15(2), 30-33.

## 要 旨

本研究の目的は、がん看護専門看護師（OCNS）のがん看護に携わる看護師への支援内容と支援による看護師自身の影響・変化を明らかにすることであった。対象者であるがん看護に携わる看護師 10 名に対し面接調査を実施し、得られたデータを質的帰納的に分析した。

その結果と考察を以下に述べる。全データから、OCNS による看護師への支援内容に関する 17 のカテゴリーが抽出され、それらの関係性から、【CNS の知識・技術による支援】【看護師の気付きへの働きかけ支援】【看護師への肯定的フィードバック】【円滑なチーム医療への支援】の 4 つが導きだされた。その中で中心となるのが、【看護師の気付きへの働きかけ支援】と【看護師への肯定的フィードバック】の看護師に対する直接的な支援であった。

全データから、OCNS の支援を受けたことによる看護師自身の影響・変化に関する 28 のカテゴリーが抽出され、それらの関係性から、【がん看護に関する知識・技術の向上】【全人的な患者理解とそのケアへの気付き】【適切なケアの提供】【看護師自身の精神面の成長】【肯定的な自尊感情の高まり】【がん看護に対するモチベーションの向上】【看護師の自律と自覚の芽生え】【医療チームの関係向上】の 8 のコアカテゴリーに分けることができた。さらに、それらの関連性から、《看護師の知識・技術の向上》《看護師の精神面の向上》《医療チームの関係向上》の 3 つの局面が導き出された。この局面の中心となるのが、ケアの質を向上させていくうえで不可欠な《看護師の精神面の向上》であった。また、3 つの局面は連動しながら看護師の成長を促進させていた。

OCNS の看護師への支援内容と看護師自身の影響・変化との関連から看護師への効果的な支援として、①看護師の潜在的な能力を引き出し、その力を延ばしていく、②《看護師の精神面の向上》を促進させる、③看護師の変化を見守りその過程を支える、④看護師との信頼関係の構築につとめる、の 4 点が示唆された。

キーワード：がん看護専門看護師，看護師，支援内容，影響と変化